

釧路川水系イトウ繁殖実態調査事業

○野本和宏（釧路市立博物館）

要旨

イトウ（サケ科parahucho属）は、北海道、サハリンなど極東アジアにのみ生息している日本国内最大の淡水魚であり、環境省により絶滅危惧IB、国際自然保護連合により「絶滅の危険が極めて高い」種(CR)に指定されている絶滅危惧種である。

釧路川流域ではイトウを指標種とした自然再生事業が展開されているが、道内4番目の流域面積を誇る釧路川はその河川規模の大きさなどから、流域全体を対象とした詳細な調査が行われていないために、いまだにその生息状況は不明な点が多い。また、イトウの姿を視認できるのは彼らの生活史の中で大きく分けると、繁殖期である4・5月のおよそ2か月間と、稚魚が浮上する初夏に限定される。このような彼らの生態的な特性や個体数の少なさなどの理由から、一般的な魚類の採集調査ではその存在すら確認できないことが多い。このような調査自体の難しさや、生息実態の不透明さはイトウの保全策を検討する上での大きな障害となっている。

本事業では釧路川水系に生息するイトウの生息実態を把握する目的で、2014年11月～2015年7月にかけて、釣り人や釧路川流域住民等を対象としたイトウ生息情報の聞き取り調査を実施し、1960年代～2014年までの22件のイトウの生息情報を得ることができた。

それらの生息情報に基づき、2015年4月～5月にかけて同水系10支流におけるイトウ産卵床の分布調査をおこない、2支流において、イトウの産卵床を確認することができた。さらに、2015年6月下旬～8月上旬にかけて、5支流の10地点において、イトウ稚魚の捕獲調査を実施し、1地点でイトウ当歳魚を採捕した。

しかしながら、釧路川自体の河川規模の大きさに加えて、調査に従事する人員の不足を背景に、いまだに水系全体を網羅した調査の実施には至っていない。

イトウの個体数や分布などの同種保全を考える上での詳細な生息情報の把握に向けて、今後も更なる詳細な調査の実施が求められる。

（※イトウ資源保護のため、生息地域が特定されるような個別の調査地点名は記載していません。）